## 10月29日のメッセージ

聖書:創世記 1: 1-5、19-23

## 「光あれ」

今日から教会暦は「降誕前節」に入りました。クリスマス=イエス降誕の時に「備える」期節です。 礼拝の中心には旧約聖書のみ言葉が置かれ、歴史の初めから今に至るまで、時を超えて貫かれる神の 救いを思い起こす時とされています。

2024年は4年サイクルの4番目の年。創造の出来事を覚えるところから始まります。

私たちは何度、この神による創造の物語を聞いてきたことでしょう。

混沌の中に神が一声発せられると、この世界は始まりました。そして、この地上に住む、ありとあらゆるものをお造りになった神は、この世界を見て、「極めて良かった」と安心されました(「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。」創世記 1:31)。

いつも、そして何度も繰り返し語られ、繰り返し聞き続けてきたように、この世界は「極めて良い」 ものだったはずです。しかし、私たちを取り巻く現実は、この「極めて良い」状態からはほど遠いと 言わざるをえないでしょう。

環境破壊は際限なく繰り返され、何度、「中断して再検討しよう」と声が上げられても、経済のサイクルが止まることはありません。

貧富の差は拡大し、弱いところ、声の小さなところに全てのしわ寄せが来ています。

強者の論理だけがまかり通り、声を上げようとする動きすら封じられてしまっています。

神はそのような「ディストピア」(ユートピアの反対)を望まれはしませんでした。どのような時も人間が立ち直り、神に立ち帰ることができるようにと目を配り、心を配り続けてこられました(「あなたが閣を置かれると夜になり/森の獣は皆、忍び出てくる。」詩編104:20、「太陽が輝き昇ると彼らは帰って行き/それぞれのねぐらにうずくまる。」詩編104:22)。

そして、そのために、イエスを私たちに与えられたのではなかったでしょうか(「神は、御心のままに、満ちあふれるものを余すところなく御子の内に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、御自分と和解させられました。」コロサイの信徒への手紙 1:19-20)。

「神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」(創世記1:3)

神はこのような混沌とした現代に、苦難の多い現実に、今一度「光が射す」と言われます。いや、「光を射す」と。

その光はもちろん、神から発せられる光です。この地上に比べるものもないほど強力で、温かい光です。全てを包み込み、全ての命を生かす光です。

それと同時にこの光は、神から命を与えられている私たちから発せられる光でもあります(「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」ョハネによる福音書 1:5)。神の言葉に聞き、神に支えられている私たちの命が発する光でもあるのです。

今こそ、私たちの命を輝かせるときです。

世の矛盾に、世の理不尽に、世の暴力に、世の闇に光を当て、 共に豊かにされる道を探したい。たとえ絵空事と笑われても、全 ての者が安心して生きることのできる「ユートピア」を目指した いのです。

